

一般口演 10

骨誘導、骨造成、GBR、咬合、咀嚼、メンテナンス、SPT

2026年9月19日(土) 14:30～15:20 第9会場(G棟・4階 G402)

日比 英晴(名古屋大学大学院医学系研究科頭頸部感覚器外科学講座顎顔面外科学)

O-1-9-1

前歯部審美領域における抜歯即時埋入時にトンネリング法を応用して低侵襲化を図ったGBRの工夫

○安齋 聡¹⁾, 奥寺 俊允¹⁾, 橋口 隼人¹⁾, 岡 吉孝¹⁾, 市場 敬基¹⁾, 佐藤 宏美¹⁾, 安齋 崇²⁾, 洪 性文³⁾¹⁾ 東京形成歯科研究会, ²⁾ 順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学講座, ³⁾ 日本インプラント臨床研究会

Clinical ingenuity in minimally invasive GBR using the tunneling technique at immediate implant placement in the anterior esthetic zone

○ANZAI S¹⁾, OKUDERA T¹⁾, HASHIGUCHI H¹⁾, OKA Y¹⁾, ICHIBA H¹⁾, SATO H¹⁾, ANZAI T²⁾, HONG S³⁾¹⁾ Tokyo Plastic Dental Society, ²⁾ Department of Otorhinolaryngology Juntendo University Faculty of Medicine, ³⁾ Clinical Implant Society of Japan

I 目的: 前歯部審美領域における抜歯即時埋入では、治療期間の短縮および審美性の維持が期待される一方、頬側歯槽骨の菲薄化を伴う症例ではGBRの併用が必要となる。しかし、高齢者や薄い歯肉バイオタイプを有する症例に対し、広範な歯肉弁剥離を伴う術式を適用することは、術後侵襲や軟組織退縮のリスクを高める可能性がある。そこで今回、歯肉弁剥離を可及的に回避し、抜歯即時埋入時にトンネリング法を応用した低侵襲GBRを併用した1例について、その臨床的工夫を報告する。

II 症例の概要: 患者は75歳女性。上顎左側中切歯(#21)の歯根破折を主訴に来院した。対象歯は失活歯であり、挺出および歯周ポケットの増加を認めたことから、保存不可能と判断した。患者のQOL低下回避を目的に抜歯即時埋入を選択し、さらに、頬側歯槽骨の菲薄化を認めたためGBRの併用が必要と判断したが、年齢および軟組織条件を考慮し、通常の粘膜骨膜弁翻転を伴うGBRではなく、トンネリング法を応用し、autologous fibrin glue (AFG) を用いて補填剤を凝集させた低侵襲GBRを埋入と同時に施行した。術後、著明な疼痛および腫脹は認めず良好に経過した。術後5か月時に印象採得を行い、最終補綴装置を装着した。現在、術後2年を経過しているが、臨床的および機能的経過は良好であり、インプラント周囲組織は安定している。CT所見においても、頬側への新生骨添加を示唆する像を認めた。

III 考察および結論: 本症例における工夫は、前歯部審美領域の抜歯即時埋入時にトンネリング法を応用することで、GBRの低侵襲化を図った点にある。特に、高齢者および薄い歯肉バイオタイプ症例においては、剥離範囲の縮小により術後反応の軽減に寄与する可能性が示唆された。一方、本法は盲目的操作を伴うため、唇側形態の付与量には限界があり、当初計画した造成量を十分に確保し得ない側面も認められた。しかし、本症例では2年経過時においても良好な臨床経過と硬組織の安定が得られており、適切な症例選択のもとでは有用な術式の一つとなり得ると考えられた。前歯部審美領域における高齢患者への対応において、治療目的と侵襲度の均衡を踏まえた術式選択が重要であると考えられる。今後も計時的変化について注意深く観察していく。(治療はインフォームドコンセントを得て実施した。また、発表についても患者の同意を得た。医療法人社団順朋会再生医療等委員会 計画番号 PC3220263)